

AJCC 平成30年5月の研究会報告

「ベス単フード外しによる作画技法」



会員番号0702 熊谷 正夫

平成30年5月12日

於：日本カメラ博物館6階会議室



写真1 VPK初期型 Body#90246

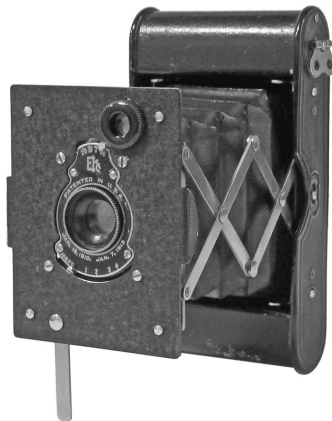


写真2 VPK後期型 Body#1713997

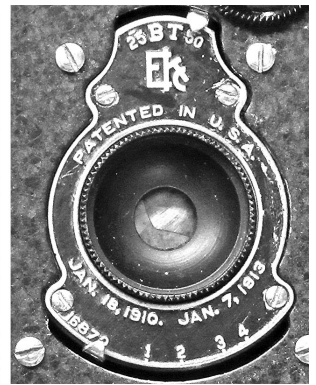
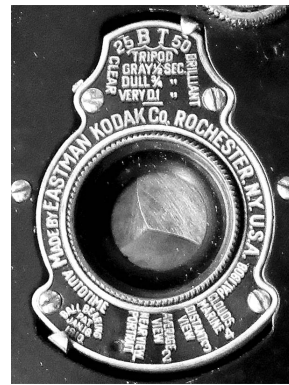


写真3 レンズ部の拡大、左が初期型、右が後期型。フード内径違いに注意。尚左の初期型の絞りストッパーは外して絞りは最大径にしてある。

アメリカ、イーストマンコダック社のヴェストポケットコダックカメラは、レンズが単玉なので「ベス単」とも愛称されています(以下「ベス単」または「VPK」と略す)。ベス単はご存知のように大正元年から昭和元年までの14年間に約180万台製造された名機で、価格も手ごろで多くのカメラ愛好家に使用され、アマチュア写真家台頭の礎を作ったと言われていました。いま手元にある初期のものはNo.90246、後期のものはNo.1713997です(写真1、2)。私は“ベス単のフード外し”の独特の描写に魅せられて、今もなおより美しいフレアのある画像を求めて挑戦していますが、なかなか思うような結果を得る事ができません。自分なりに趣味として楽しんでいる現状や、より美しい描写を求めて来た過程等について報告いたします。

初期、10万台までの絞り表示を見ると、絞り“1”の表示の左に丸い印があります。それがストッパーです。プレートを取り外して裏側の突起をヤスリで削ると、ストッパーが外れて絞りが大きく開きます。前期



写真4 フード外しの絞りの状態(左から順に、A絞り、B絞り、C絞り、本来の最大絞り位置(絞り1))

のフードの穴の直径は11.25mm、後期のフードは7mmと小さくなっています(写真3)。後期のVPKには絞りのストッパーがないので、フードの内径に最大絞りの役目をさせているのです。後期のVPKでフード外し撮影を行うには、フードは互換性があるので、フードを前期の内径の大きいものに交換すればよいのです。写真3、4(但しフードは外した状態)参照。

絞りのセットと、そのおおよその絞り値と撮影対象は、

A絞り： フードを外し一番左にセット時 約F6.3 顔のアップ

B絞り： A絞りと絞り1の中間 約F7 半身像

C絞り： B絞りと絞り1の中間 約F7.7 遠景の風景

これはあくまでも目安であり、撮影者の好みで設定すべきだと思います(写真4)。

フィルムカッター、暗室、現像

(写真5～7)

ブローニー判120のフィルムを、ベスト127に裁断する時には、ダークバックか、暗室内での作業になります。作業にあたっては、カッターの刃の隙間に切りくずがあると失敗するので丁寧に点検するこ



写真5 フィルムカッター(120から127を切り出す)



写真6 フィルムカッター用替え刃(OLFA)



写真7 暗室



写真8 左から現像タンク、停止液、定着液

と。小さな刷毛か筆の先を切ったもので切りくずを取り除くこと、新しい刃を用意しておくことなどが注意を要する点です。裁断した最終端に、はがしたテープでフィルムをリーダーペーパーに張り付ける。忘れると巻き上げ不能になります。

今から23年前の横須賀本港(写真9)

VPKフード外しに興味を持った最初の頃の写真。現在のヴェルニー公園の岸には、廃船が係留されていて、船体に水面の光が反射していました。1995年(平成7年)9月初旬撮影。フィルムはクロアチア

製のベスト判。ISO100、D76 現像。現像むらがあります。

ごく最近撮った二枚の写真

横須賀ヴェルニー公園に、2基の旧海軍の衛兵詰所門があります。煉瓦造りの営門は毎年桜に飾られます。今年3月29日撮影(写真10)。初期のVPKで撮影しました。煉瓦や鉄格子の描写はシャープですが、不思議なことに、人や桜の花はソフトな描写です。ネオパン、アクロス120を127に裁断。D76、20℃、8分。

写真11は大船フラワーセンターで4月

13日に撮影した一枚です。

四月の月上旬に突然フジフィルムからモノクロフィルム及び印画紙製造打ち切りの発表があり、衝撃を受けました。今後の事を考え、イルフォード120、ISO100を購入し127に裁断して使用してみました。二枚とも、印画紙はイルフォード・マルチグレートRCを使い、コレクトールで現像。外国のフィルムと印画紙が市販されている間は、モノクロ写真撮影が楽しめることを確認しました。以前コダックのプラスXで撮影し、失敗したこともありましたが、イルフォード100は、リーダーペーパー、フィルムベースともにフジよりも厚く、固い感じでした。裁断に指が疲れました。

最近の事情から話を始めましたが、使っていくVPKを今も使用している経緯などについて、話を進めたいと思います。話が前後することもあるかと思いますがお許しください。



写真9 23年前の横須賀本港



写真12(左)、写真13(上) ゼンザブロニカSiにVPKレンズを取り付けて撮った写真と、VPKのレンズを取り付けたブロニカSのレンズ部



ごく最近撮った2枚の写真。左:写真10 旧海軍衛兵詰所と、右:写真11 大船フラワーセンター





写真15 ロンドン塔

写真16 ウィンザー城

←写真14 パルテノン神殿にて

今から20数年ほど前に「バス単フード外し」に興味を感じてチャレンジしましたが、失敗の連続で苦心惨憺しました。そこで、VPKレンズをゼンザブロニカSに取り付ける事を考えました。水道のエンピパイプを使ったり、ブラックテープで止めたり、工作が稚拙で、恥ずかしい限りでしたが、それでもVPKレンズの描写は見事でした(写真12、13)。

なるよ」と忠告を受けました。その国の生活の一端に触れることが大切であるという教えて下の3点に尽きると思います。抽象的な言い回しになりますが、
・固定観念にとらわれないこと。
・自分の日常生活と比較しないこと。
・頭を空にして、概念を砕くこと。
その国の生活に関心に向ける。要するに、表面的な美しさ、珍しさを撮るのではなく、「良く見る」姿勢を身に着けることを教えられました。それ以後再び「フード外し」に熱中しました。今から11年ほど前の11月初旬でした。

のひと時を寛ぐ人が、楽しそうに歓談していました。おもしろも晩秋の陽光がウエイトレスの肩を優しく浮き立てていました。陰影に富んだ被写体を撮った一枚です。
澄み切った秋の光は思いのほか陰影を強く浮き立てていました。街路樹の木陰から見つめ、客の注文を書き留めるウエイトレスの動きに合わせて、静かにシャッターを押しました。
手振れしないシャッターの押し方は、カメラに人差し指を固定し親指で押し込むように切ります。この方法だとほとんど手振れしません。

海外旅行とVPK(写真14、15、16)

海外旅行にはVPK、オリンパスOM2にキヨハラVK50Rなどを持参。「光大」の古老から「エトランゼの眼で撮ると表面的に

ティータイム(写真17)

横浜大棧橋入口の喫茶店で、昼休み

円覚寺瑞光(写真18)

二月の円覚寺は梅も咲き始め、光はいよいよ明るさを増します。VPKに相応しい



←写真17 ティータイム
横浜大棧橋近くの喫茶店。ウエイトレスの肩にあたる秋の陽光が優しい。



写真18 →
円覚寺瑞光、光のにじみは剃髪した僧侶の頭に後光を生んでいる。



写真19、20 円覚寺参道。山門石段から総門を俯瞰する石畳の参道は私の好きな撮影位置です。



左から順に写真21、22、23 横須賀駅前風景とヴェルニー公園(写真21は手振れした失敗作です)。



左から順に写真24、25、25 横須賀軍港巡り観光船(3枚の組み写真)

雰囲気です。光のにじみは、暗い方から明るい方に向かい、明暗差が大きいほどその効果が表れます。折よく通り過ぎて行った僧侶の、剃髪した頭から、後光が射っていました。斜め光線で、明暗差のある風景は、VPKフード外しに相応しい被写体です。芽吹き前の梢は花と見まがうように輝きます。花の頃や紅葉の時は観光客で賑わうので、季節と時間を選び、光を見極めて撮影を楽しむのも、至福のひとつです。

円覚寺参道にて(写真19、20)

「山門を入ると、左右に大きな杉があって、高く空を遮っているために、路が急に暗くなった」。漱石の小説「門」の一節ですが、悟るべくして、円覚寺を訪れた宗助(漱石)は塔頭の「帰源院」に投宿します。押し迫った暮れから正月の短期間、悟りを求め参禅しましたが、悟り得ずして帰京する。山門石段の上から総門を俯瞰する石畳の参道は私の好きな撮影位置です。

横須賀駅前風景とヴェルニー公園

JR横須賀駅舎を背にして本町方面を望むと、再開発された近代的な都市景観が輝き、本町山中高速道路の高架が頭上

にのしかかっています(写真21)。横須賀駅舎は昭和初期の面影を残した建物で階段のない駅として有名です。近代的な都市景観を「VPK」で撮ると、郷愁漂う、懐かしい風景となるのも不思議です。

駅から本庁までの海沿いにフランス風のヴェルニー公園が続いています。バラの名所としても有名です(写真22、23)。

軍港めぐり観光船(写真24~26)

かつては要塞地帯であった軍港も「軍港めぐり観光船」でアメリカの軍艦や海上自衛艦を身近にみるすることができます。第一便は午前10時、1時間おきに就航、約45分の船旅です。最終便は午後4時です。第一便は、朝の光に満ちていますが、観光客も少ないので、旅愁漂う情景を撮るために午後2時の出航を狙いました。動きのある被写体を撮影する時に、デジタルカメラの使いやすさを実感します。船の動きが思いのほか早く感じられました。

称名寺

金沢区の称名寺は、「VPK」の撮影場所に最もふさわしいと思います。正月三日の午後、初詣を兼ねて出掛けました。

昨年この場所で撮った写真は失敗でしたので、撮影場所をいろいろ考えました。同じ場所を訪れて、前回の失敗を考えながら撮るときに、何か見えてくるものがあります。撮影場所が予定されていると心の準備もできます。逆光の仁王門(写真27)は門の中に入って日陰から撮ったので成功しました。フード外しの魅力は曖昧模糊としたフレアーの中に、ピントの合った繊細な描写の美しさにあると思います。

明月院と浄智寺参道の階段

紫陽花寺として有名な明月院の参道は鎌倉石の石段です。湖底や海底に沈んだ堆積物が固まってできた鎌倉石は、柔らかく吸水性があり摩耗しやすく、苔が生



写真27(右上)称名寺仁王門、下左から写真28、29、30称名寺庭園



写真31 明月院の階段



写真32 浄智寺参道の階段



写真33 三溪園三重塔



写真34 三溪園臨春閣

えやすいので、独特の「詫び寂び」の様子が表れます。浄智寺の石段も同じく鎌倉石です。摩耗が激しく、独特の風情をあらわしています。鎌倉の古寺に相応しい風情です。

「VPKフード外し」の撮影に相応しいので、折を見ては訪ねています。季節と時刻によって変化しますが、晩秋から早春の頃が好期です。浄智寺山門に「宝所近在」の扁額が掲げられています。

三溪園

三溪園を象徴する三重塔は、1914年(大正3年)に京都の燈明寺から移築されました(写真33)。バス単誕生と歳を近くすると思うと愛おしいです。

大池に面したベンチで寛ぐ人の、背中

には物語があり、会話が聞こえます。手前の松の輝きは「フード外し」独特の輝きです。11月下旬の、晩秋の光が輝いていました。

臨春閣は大正6年(1917年)に、紀州徳川家の別荘を移築した建物で、VPKで撮影するには相応しい情緒を備えています(写真34)。特に光を見極めて、独特の「光のにじみ」を表現するには最適な風景です。11月下旬の光は周囲の樹木や建物、水面の映りを独特な描写でとらえています。風景を生かすのは添景です。

その位置や、動きの一瞬をとらえるのがなかなか難しいです。偶然であり、必然でもあるその一瞬、すべてが一期一会かも知れません。

観音崎にて

観音灯台は、日本で最初に点灯された西洋式灯台として有名ですが、灯台に至るまでの道もまた風情があり、「フード外し」の撮影に適した観光地です。岩場が多く、砂浜は僅かですが、4月末には、浜大根の花が一面に咲き、夏には海水浴客で賑わいます(写真35)。

2月初旬の明るい光の中を、若い女性が、美しい声で話しながら通り過ぎて行きました(写真36)。暫くして同じ場所から、光を背にして眺めていると、家路を急ぐ人が通り過ぎて行きました(写真37)。VPKは、それぞれの情景を、暖かく写してくれました。

光と影の美しさを写す「VPKフード外し」こそ「わが想い」を表現してくれる伴侶です。

(了)



左から順に写真35、36、37 いずれも観音崎にて